

NEWS

2003.11 ~
2004.2

何が変わるのか 「大学法人化」

ここ二十年あまり、行政改革をはじめとして各界のさまざまな分野で改革が行われてきました。高等教育分野においても、臨時教育審議会や大学審議会等で大学改革に関する審議が行われてきましたが、国立大学の法人化が本格的に検討の対象となったのは、平成十一年四月に「国立大学の独立行政法人化については、大学の自主性を尊重しつつ、大学改革の一環として検討し、平成十五年までに結論を得る」と閣議決定されたことによります。

その後、法人化スケジュールは前倒しとなり、当初予定より若干早く、昨年七月国立大学法人法が成立し、今年四月より国立大学は国立大学法人となります。芸大も国立大学法人東京芸術大学として新しく出発いたします。法人化というと、民営化するののかという疑問をお持ちになるかもしれませんが、そうではありません。予算は今までと同じように、運営費交付金という形で国から支給されます。では何が変わるのかというと、まず運営組織

が変わります。今までは教授会が大学運営の中心で、最高議決機関として評議会がありました。しかし、法人化後は学長がリーダーシップを発揮するトップダウンシステムとなり、学長の下に「役員会」が置かれ、それを補佐する組織として、「経営協議会」（主に大学の経営面を審議と「教育研究評議会」（主に教育研究面を審議が置かれます。役員会には学外理事が一名以上、経営協議会には学外有識者が半数以上配置されます。つまり、社会のニーズを積極的に取り入れていくということことです。こうした運営組織改革により、学長は大学運営の最高責任者として大きな権限を持つと同時に、その結果に対して大きな責任が問われることとなります。業績が上がらない場合、学長解任ということもありうるのです。次に、各国立大学法人は、文部科学大臣が示す六年間にわたる中期目標に基づき、それを実行する中期計画を立てます。（註）この中期計画の達成度が国立大学法人評価委員会と

交流

パキスタン・国立ラホール芸術大学との交流に関する懇談

十二月二日、学長室において、パキスタンの国立ラホール芸術大学長サイード・ヴァンダル(Sajida Vandal)女史と平山都夫学長ほか五名が、本学と国立ラホール芸術大学との交流及び交流協定締結に関して懇談した。

昨年三月、日本とパキスタン国交樹立五十周年記念式典がパキスタンで開催された際、学長同士による交流に関する意見交換を行い、この度、本学の招へいにより学長ほか一名が本学を訪問することになったもので、十一月二十九日から十二月四日までの滞在中、本学関係教官との懇談や施設等の視察並びに国際交流基金訪問や都内美術館等を視察した。

音楽学部学生と中学生が奏楽堂で共演

本学音楽学部が地域交流を図る目的で始めた御徒町台東中との合同演奏会は、今年で三回目。芸大生による指導と練習を重ねた中学生と音楽学部学生の演奏に対して、会場を埋めた聴衆から惜しみな拍手が寄せられた。入場者数は八〇〇人。音楽学部では、この事業に八二名の教官・学生が指導にあたった。当日は四九名の学生と約六〇名の中学生が演奏に参加した。

受章・受賞

文化勲章、本学教授を歴任した二名が受賞

平成十五年十一月三日、日本画家の加

山又造名誉教授と詩人で元音楽学部教授の大岡信氏が文化勲章を受章された。

中林忠良教授が紫綬褒章を受章

平成十五年秋の褒章において、本学絵画科の中林忠良教授（銅版画）が紫綬褒章を受章された。

平山都夫学長が朝日賞を受賞

一月一日、平山都夫学長が、画家としての長年の業績と、文化遺産保存への国際的貢献に対して、二〇〇三年度の朝日賞（財団法人 朝日新聞文化財団主催）を受賞した。

中西夏之氏が毎日芸術賞を受賞

一月一日、昨年三月に退官した中西夏之元美術学部教授（油画）が、特に優れた芸術的成果を上げた個人・団体に贈られる第四五回毎日芸術賞（03年度/毎日新聞社主催）を受賞した。

運営

音楽学部六教官退官記念演奏会を開催



© 鈴木 薫

一月二十九日、重要無形文化財総合指定保持者の野村四郎教授（能楽）が、学内ホールにおいて退官記念演奏会を開催した。また、昨年十一月九日に有賀誠

大学評価学位授与機構等によって評価され、その結果によってそれ以後の運営費交付金の額が決定されます。

ただし、文部科学大臣が中期目標を示すとはいつても、大臣が実際に全ての大学についての目標を決められるわけではありません。また、それでは各大学の独自性が活かされず、自律・独立性が損なわれることにもなりかねません。そのため、各国立大学法人がそれぞれ中期目標についての意見を述べ、それに基づいて文部科学大臣が中期目標を決定することとなっています。なお、中期目標・中期計画策定にあたっては、国立大学法人評価委員会が文部科学大臣に意見を述べることでされています。

大学運営に必要な資金は運営費交付金の他教育研究に関連した事柄であれば、大学独自の資産を活用した事業収入を資金とすることも可能となります。授業料、検定料のほか、芸大であれば美術館や奏楽堂の展覧会・演奏会収入等も今までは国庫金として国に納めていたのが、大学の収入として直接活用できることとなります。従来、大学予算は、大学の規模に応じて配分され、特別な事柄は必要に応じて申請する仕組みでしたが、今後は、運営費交付金としてひとくくりされた渡し切り費になるので、それ以上の事業のためには、産学連携といった外部資金導入など、大学が積極的に資金を獲得することが必要となります。会計システムも、民間企業と同じ企業会計システムとなり、予算の使い道に今までのような使途区分による縛りがなくなる反面、経常経費削減など、より効率的な経営が求められます。

教職員の身分ですが、国立大学法人の職員として公務員ではなくなります。公務員でなくなることによって、学長に外国人を迎えることや、兼業規制の緩和等が可能となる反面、今までのような身分保障はなくなり、雇用者と労働者という関係になります。非公務員化に伴い、適用される法律が変わるため、就業規則や安全衛生規則などの諸規則も整備しなければなりません。芸大においては、教員も今までのように単なる終身雇用ではなく、一定の期間ごとに業績が評価されるようになります。

芸大で学ぶ志を持った人にとって最も関心のある入学生料・授業料ですが、来年度は変わりません。ただし、検定料については引き上げの方向で検討されています。なお、入学生料・授業料は今までも毎年交互に引き上げられてきましたが、今後どのようにするか、引き続き検討を行っていきます。

法人化は、国立大学にとって新制大学発足以来の大変革です。学生にとって、すぐに目に見えるような大きな変化はないとはいえ、法人化は芸大にとり未知数のことが数多くあります。運営費交付金も、1%程度は削減されていくのではないかとはいわれています。法案成立後の準備期間も極めて短く、教職員には今までの発想を切り替え、一体となって運営に当たる覚悟が必要でしょう。しかし、法人化を契機として、芸大は今まで以上に芸術文化伝承と創造の拠点として飛躍していくことを決意しています。

〔注記〕
（各国立大学の中期計画の素案は文部科学省のホームページ上で見ることができます。）
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/index.htm

門教授（打楽器）が奏楽堂で、一月十九日には辛島輝治教授（ピアノ）が学内第六ホールにおいてそれぞれ退官記念演奏会を開催。さらに、三月二十一日には、嶺貞子教授（声楽）、鈴木寛一教授（声楽）、實相寺昭雄演奏芸術センター長の退官記念演奏会が奏楽堂で行われる予定

2003の開催 取手アートプロジェクト



取手アートプロジェクトは、若いアーティストに育成の場と機会を提供し、市民のアートに対する関心と意識を高め、地域における芸術文化の活性化を促すことにより、関係諸機関および市民が相互協力して、アートによるコミュニケーションが可能な仕組みを形成することを目的に、一九九九年から取手市、市民、地元企業、本学先端芸術表現科などが一体となって実行委員会を組織し、継続的に進めている文化事業

五年目を迎える今年は、本学の学生・卒業生や地元作家など取手在住作家がアトリエを公開したり、商店街の空き店舗をアトリエに見立て展示や公演を行う「オープンスタジオ「取手」をメインに取手駅付近の高架下壁面に学生と市民の協働により壁画を描く「壁画プロジェクト」、演出家の宮城聰氏を迎えた公開授業などを実施した。

毎年このプロジェクトを支援している

美術学部先端芸術表現科に加え、今年から大学院美術研究科絵画（壁画）専攻や音楽学部音楽環境創造科の学生がこのプロジェクトに参加した。

創作展からアートパスへ

毎年、学生を主体として本学取手校地で開催されている展覧会「創作展」が、今回から「アートパス取手」と名称を変更して、十一月三日～七日（一般公開十一月五日～七日）まで行われた。

従来の「創作」の文字ではおさまらなくなつた、さまざまな表現。「poet」という言葉が、小道、踏み跡、進路、軌道、方針といった幅広くとらえられる意味合いを持っており、芸大取手校地を表現するのに適当として変更された。

實相寺演奏芸術センター長、監督の立場から講演

一月二十九日、附属図書館閲覧室において、演奏芸術センター教授で實相寺昭雄同センター長が、「私と芸術」ウルトラマンの監督から」と題して、講演を行った。上野浩道附属図書館長が、美術音楽両楽部に共通する映像分野にスポットをあて、学生、一般向けに企画したもので、本学図書館では初の試み。

實相寺センター長は、「ウルトラマン」、「ウルトラゼン」や、「無常」、「帝都物語」などを監督し、舞台オペラ演出、著作などでも活躍中。

講演後の質疑応答では、撮影の裏話を交えたユーモアあふれる語りで答え、会場を埋めた聴衆から割れんばかりの拍手を受けていた。

訂正とお詫

前号「タイムカプセルに乗った芸大 第7回 挿図キャプションに誤りがありましたので訂正してお詫申し上げます。」

「種田一穂（誤）」「運尾辰雄（正）」